

# 高等学校における基礎・基本の定着を 図るための指導に関する研究

— 単元を見通した授業づくり —

荒川 憲行<sup>1</sup> 山本 城<sup>1</sup>

高等学校学習指導要領改訂の基本方針の中で、各教科において基礎的・基本的な知識・技能の習得を重視することが述べられている。本研究では、義務教育段階の学習内容と高等学校での既習事項を踏まえ、単元を見通した高等学校における基礎・基本の定着を図る方策を講じることとし、確かな学力の育成に資することを目指した。

## はじめに

21世紀は新しい知識・情報・技術が、社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す、いわゆる「知識基盤社会」の時代であると言われている。このような状況において、「生きる力」を育むことがますます重要になっており、「生きる力」を支える確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和のとれた育成が重視されている。

「生きる力」を支える要素の一つである確かな学力を育成するためには、基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させること、そしてこれらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等を育むことが大切である。また、学習意欲を向上させ、主体的に学習に取り組む態度を養うとともに、家庭との連携を図りながら、学習習慣を確立することも重要である。

以上のように、確かな学力を育成するためには様々な要素が必要であるが、その中で基礎的・基本的な知識・技能の習得に重点を置き、高等学校における基礎・基本の定着を図る指導に関する研究を行うこととした。

## 研究の目的

本研究は、高等学校における基礎・基本の定着に焦点を当て、6名の調査研究協力員による単元を見通した授業づくりを通して、基礎・基本の定着を図るための効果的な単元計画、学習指導方法等の研究を行い、高等学校における確かな学力の育成に資することを目的としたものである。

## 研究の内容

### 1 学力調査等に見る基礎・基本の定着状況

本項ではまず、学力調査等における基礎・基本の定

1 カリキュラム支援課 指導主事

着状況と、そこから見いだされる課題についてまとめることにする。

#### (1) 基礎的・基本的な知識・技能の定着

平成15年度小・中学校教育課程実施状況調査の結果では、平成13年に実施した前回調査との同一問題の正答率の経年変化において、「有意に上回る」問題数は全体の約43%になった。この結果を受けて、中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」

（以下、「H20 答申」という。）では、「基礎的・基本的な知識・技能の習得を中心に一定の成果が認められる」（中央教育審議会 2008 p.12）としている。また、平成19年度全国学力・学習状況調査では、主として「知識」に関する問題の学習内容については、相当数の子どもたちがおおむね身に付けていると考えられるとしており、これを受けて「H20 答申」では、「各種調査の結果からは、基礎的・基本的な知識・技能の習得については、個別には課題のある事項もあるものの、全体としては一定の成果が認められる」（中央教育審議会 2008 p.14）としている。

#### (2) 基礎・基本の定着における課題

平成17年に公表された文部科学省「PISA 調査、TIMSS 調査の結果分析（中間まとめ）」では、数学的リテラシーの算数・数学において、「基礎的・基本的な計算技能、数についての感覚などに課題がある」（文部科学省 2005）としている。

また、「平成21年度 神奈川県立高等学校学習状況調査報告書」の結果では、国語について、「『言語事項』については、漢字を読み、書く力が十分に身に付いていない」（神奈川県教育委員会 2009 p.8）、数学について、「図形の相似比と面積比との関係を理解していない」（同 p.10）、外国語について、「解答状況から基本的な語句の定着が不十分な生徒がいることが分かる」（同 p.54）など、基礎・基本が十分定着していない状況を読み取ることができる。

さらに、「平成22年度 全国学力・学習状況調査 調

査結果のポイント」では、「思考力・判断力・表現力等といった、知識を『活用』する力と合わせ、基礎的・基本的な知識・技能もしっかりと定着させることが重要である」（国立教育政策研究所 2010）と述べられている。

以上のことから、基礎的・基本的な知識・技能の定着については、おおむね身に付いているといえるものの、個別には課題のある事項も多くある。

本研究では、より確実な基礎・基本の定着が必要であると考へ、その方策について研究を進めた。

## 2 基礎・基本の捉え方

ここでは、基礎・基本を捉える様々な視点を整理し、本研究における基礎・基本の捉え方について説明する。

### (1) 基礎・基本を捉える様々な視点

#### ア かながわ教育ビジョン

神奈川県教育の総合的な指針である「かながわ教育ビジョン」では、「『読み・書き・計算』等の基礎・基本\*」（神奈川県教育委員会 2007 p.14）の記述があり、用語解説ではこの基礎・基本を「読み、書き、計算能力に加え、思考力、判断力、表現力、課題発見能力、問題解決能力、学び方、学ぶ意欲などで構成される『確かな学力』を支えるもののこと」（同 p.62）と説明している。

#### イ 中央教育審議会答申

「H20 答申」では、学力の重要な要素として、①基礎的・基本的な知識・技能の習得、②知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等、③学習意欲、の三つの柱を明確に示したが、これらの要素はそれぞれが独立しているものではなく調和的に定着・育成することを重視するとしている。

#### ウ 学習指導要領

中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会「審議経過報告」では、「学習指導要領に示されている教育内容は、いわゆる基礎・基本であり、特にその内容が精選されている以上、そのすべてを確実に習得させることを目指すとの考え方が基本となる」（中央教育審議会 2006）としている。学習指導要領に示されている教育内容は、高等学校では、各教科、総合的な学習の時間、特別活動となる。

平成 21 年 3 月には高等学校学習指導要領が公示され、総則の中では、学校や生徒の実態等に応じて義務教育段階の学習内容を確実に定着させるための指導を行うことが新たに示されている。

また、高等学校教育の目標は、義務教育の成果を発展・拡充させることにあり、生徒の多様な興味・関心や進路等への対応が必要であることから、教育課程は各高等学校が生徒の実態に応じて教育内容を様々な方法で学ばせるための弾力的な枠組みとなっている。

こうした趣旨を踏まえ、本県においても各高等学校

は、学校や生徒の実態等に応じた教育課程を編成するとともに、各校の特色ある教育活動の実現を目指す教育課程の編成に努めているが、高等学校に入学してくる生徒の基礎・基本の定着状況には、学校によって大きな差があるといえる。

#### エ 高等学校段階における基礎・基本

高等学校における基礎・基本は、ますます多様化する生徒の興味・関心、能力や適性、進路希望等に対応したものとして考えていかなければならない。

つまり、高等学校の基礎・基本については、まず義務教育段階までの学習内容があり、その上に、高等学校の生徒全員に共通する履修教科・科目の内容がある。さらに、大学や専門学校等の高等教育に求められる学習内容や、高等学校卒業後すぐに就職する場合など職業的な自立に必要な学習内容など、進路に応じた学習内容が考えられる。各学校ではこれら三つの内容を、生徒の実態等に応じてそれぞれ明確化し、適切な学習指導を行っていく必要がある。

こうしたことから、高等学校における基礎・基本については、高等学校の生徒全員に共通するものと、各学校や生徒の実態等に応じたものの両面から考える必要があり、言い換えれば、学校ごとに自校の基礎・基本を明確化する必要があるということになる。

### (2) 本研究における基礎・基本の捉え方

基礎・基本を捉える様々な視面に鑑み、本研究において高等学校における基礎・基本を次のように捉えることとする。

義務教育段階までの学習内容及び高等学校学習指導要領に示された各教科の目標と内容を基準とし、各高等学校・生徒の実態に応じて設定した学習内容。

各高等学校においては、義務教育段階までの学習内容を把握し、生徒の適性や進路希望等を見通して、自校の生徒の実態に応じた基礎・基本を設定することが大切となる。基礎・基本の定着を図るために、思考力・判断力・表現力等の育成につながる言語活動の充実を図りながら、効果的な指導計画、指導方法や教材・教具の工夫等を探っていくことが各学校には求められる。

## 3 基礎・基本の定着を図るための授業づくり

本研究における調査研究協力員会において、基礎・基本が定着しない理由とその改善の方策を検討した。その結果を踏まえた授業づくりのモデルを提案する。

### (1) 基礎・基本が定着しない理由とその改善の方策

#### ア 生徒の学習に関する理由

- ・単調で機械的な繰り返しの学習活動が多い。
- ・覚えた知識を単に再現するだけで、それを使う場面や機会が少ない。
- ・一度学習した内容を他の単元や他の教科等で振り返る場面が少ない。

- ・学んだことが実生活と結び付かず、単なる知識で終わっている。
- ・家庭で学習する習慣が身に付いていない。

#### イ 教員の指導に関する理由

- ・生徒の基礎・基本の定着状況を正確に把握していない。
- ・基礎・基本の定着を図るための計画的な授業づくりがなされていない。

#### ウ 基礎・基本の定着を図るための方策

- ・生徒が興味・関心を持つような様々な学習活動の工夫をし、単に繰り返す学習だけではなく、基礎・基本を活用する学習活動を計画する。
- ・ペアワークやグループワーク等の授業形態の工夫を図る。
- ・基礎・基本の定着の視点を取り入れた指導計画を立て、その中に基礎・基本の定着度の把握・確認及び振り返り等、検証の機会を設ける。
- ・家庭学習を視野に入れた指導方法を取り入れる。

#### (2) R-PDCA サイクルを取り入れた「基礎・基本の定着を図るためのフローチャート」の作成

(1)で整理した方策に基づいて、授業づくりのモデルとして R-PDCA サイクルを取り入れたフローチャートを作成した。R (Research:調査)、P (Plan:計画)、D (Do:実施)、C (Check:検証)、A (Action:改善)に、整理した方策と具体的な手立てを組み込み、一つの単元を1サイクルとした。もちろん、学校目標に沿って年間を見通した授業計画を立て、それを基に各単元の計画を立てることが基本にある。そこで、単元を基にした R-PDCA サイクルの前に、年間を通した授業計画を立てるポイントを「事前の準備」として記し、本研究の中心である「基礎・基本の定着を図るためのフローチャート」(第1図)を示すこととした。このフローチャートでは、R、D、Cの各段階で基礎・基本の定着を図る上での手立てを講じた。

#### 事前の準備

- ・生徒に身に付けさせたい基礎・基本を、各教科で学年ごとに整理する。
- ・単元計画立案の際に単元目標(学習のねらい)を明確にする。
- ・本単元に必要な基礎・基本を整理する。
  - (1)義務教育段階における既習事項
  - (2)本単元に至るまでの、高校入学後の既習事項

#### 【R】既習の基礎・基本の定着度の把握

- ・「事前の準備」で整理した、本単元に必要な基礎・基本の定着度を、単元の学習計画に先立って把握する。
- ・把握した結果は生徒にフィードバックし、教員と生徒の双方が基礎・基本の定着状況に関して共通理解を図る。
- ・教員は結果を単元指導計画にいかし、生徒は定着が不十分な箇所を意識して単元の学習に臨む。

手立  
て1  
既習の  
基礎・  
基本の  
定着度  
を把握  
する

#### 【P】単元指導計画の作成

- ・【R】の結果を基に、本単元を理解するのに必要な既習事項の基礎・基本と、本単元における基礎・基本を明記し、基礎・基本の定着を図る視点を入れて、単元指導計画を作成する。

#### 【D】授業の展開

- ・基礎・基本の定着を意識して、授業形態を工夫したり、様々な手立てを講じたりしながら、学習指導を行う。
- ・基礎・基本の定着度を、単元の途中で丁寧に確認しながら授業を進める。定着度によっては授業を再構成する。

手立  
て2  
基礎・  
基本の  
定着度  
を図る

#### 【C】基礎・基本の定着度の検証

- ・基礎・基本の定着度の検証を、単元の終わりだけでなく、単元の途中にも実施する。その結果に応じて、基礎・基本の定着を図る授業を再構成する。
- ・定着状況が思わしくなければ、家庭学習用教材等を用いて、適切な指導を行う。

手立  
て3  
基礎・  
基本の  
定着度  
を検証  
する

#### 【A】今後の学習に向けての改善

- ・定着度の検証を通して明らかになった成果と課題を踏まえ、今後の学習に向けて適切な改善策を講じる。

第1図 基礎・基本の定着を図るためのフローチャート

紙幅の関係で詳細な内容は紹介できないが、各手立ての例を参考までに挙げておく。(第1表)

第1表 R、D、Cで用いられた手立ての例

手立て1：既習の基礎・基本の定着度を把握する
ワークシート、アンケート、発問、小テスト(レディネステスト)、家庭学習プリント、机間指導
手立て2：基礎・基本の定着を図る
ワークシート・学習プリント、発問、教材・教具、授業形態(ペアワーク、グループワーク)、板書、声に出させる活動、基礎・基本に意識を向けさせる活動、机間指導
手立て3：基礎・基本の定着度を検証する
要約・説明・論述・発表、発問、家庭学習プリント・教材、確認テスト(定期テストを含む総括テスト)、振り返りシート、アンケート

また、Planの単元指導計画作成の詳細に関しては、本研究の成果物である「<高等学校>基礎・基本を定着させる授業づくりガイドブック」を参照していただきたい。

#### 4 基礎・基本の定着を図るための授業実践事例

本項では、本研究における3教科6例の授業実践事例の一部を紹介する。

- (1) 国語(現代文)3学年：評論「支配の役割」ア 単元の目標

- ・文章の構成、展開、要旨などを的確に捉えられるようになる。
- ・文章の内容を批評することを通して、人間や社会について自分の考えを深めたり発展させたりする。
- ・様々な情報を分析、整理して、自分の意見を書く。

イ 単元において定着を図る基礎・基本の概要

- ・文章の中心的な部分と付加的な部分、事実と意見などを読み分け、目的や必要に応じて要約したり要旨を捉えたりすること。

ウ 単元を通して行った手立て

- ・手立て1：アンケート、ワークシート
- ・手立て2：ワークシート、板書、授業形態（グループワーク）
- ・手立て3：論述、アンケート

エ 実践後の考察

ワークシート（第2図）を使って、本文を評論における仮説、検証、主張の三つの基本文型に分類させたところ、筆者の考え方（仮説）が述べられた部分であっても、その考え方に共鳴してしまうと、事実である（検証）と認識してしまうことが多いことが分かった。そこで、グループワークを取り入れ、自分の考えを互いに説明し合い、グループで検討しながらワークシートに記入していく、という手立てを講じたところ、より主体的に授業に取り組む姿勢が見られるとともに、意見と事実などを読み分け、要旨を捉えて論述する学習に成果があった。これらの活動を通して、基本文型への理解が進み、評論読解の基礎・基本の定着が図られたことが分かった。

課題としては、グループワークは質の高い学習が可能となる半面、時間が掛かる学習形態であることから、教師による説明の方が効率的で分かりやすい、と感じる生徒もいたので、グループワークの有用性や学習の効果を感じ取らせる指導が必要ながことが挙げられる。

課題 二百字で要約をしましょう。	⑨～⑬段落	①～⑧段落	評論「支配の役割」要約ワークシート 組番 氏名	
				仮説の段落
				検証の段落
			主張の段落	

第2図 「要約ワークシート」

(2) 国語（現代文）3学年：小説「おぼろ月」

ア 単元の目標

- ・表現を味わい、小説を読む面白さ、楽しさを実感

する。

- ・作中の人物・心情・情景などを表現に即しながら的確に捉える。
- ・短編小説の構成・展開の妙や文体のテンポの良さを読み取る。

イ 単元において定着を図る基礎・基本の概要

- ・文章中の表現から、時代設定や登場人物の設定を的確に読み取ること。
- ・登場人物の心情を表す表現や慣用的な表現の意味を理解すること。

ウ 単元を通して行った手立て

- ・手立て1：ワークシート
- ・手立て2：ワークシート、授業形態（ペアワーク、グループワーク）
- ・手立て3：論述

エ 実践後の考察

ワークシート（第3図）を使って本文に現れる語句の意味を確かめたところ、本文読解に必要な登場人物の心情に関わる基本的な語句の理解が不十分であることが分かった。そこで、発問により語句の意味を確認しながら授業を進めるとともに、ペアワークやグループワークを適宜組み合わせ、心情を表わす表現を文中から抜き出し、心情を読み取ってワークシートに記入していく、という手立てを講じた。その結果、ふだん自分の考えを文章化することが苦手な生徒が、他の生徒との意見交換を通して自分の言葉で考えをまとめることができた。また、大多数の生徒が、本文に書かれていない主人公の言動を想像し、論述することができた。これらのことから、文章中の表現から登場人物の設定を的確に読み取るとい、小説読解の基礎・基本の定着が図られたことが分かった。

課題としては、ペアワークやグループワークに積極的に取り組めない生徒を授業に参加させる工夫や、一部の生徒の発言に左右されずに吟味しながらそれらを聞く態度の育成等が挙げられる。

おぼろ月 3年 組 番 氏名	語句の意味の確認
① 次の語句の意味に適する語を答えなさい。	
語群①～⑥	①結婚 ②帰る ③会話 ④口数 ⑤気がね ⑥よそ
P170	①口をはさむ 他人の（ ）に横から割り込む
P171	②縁談 候補者を挙げてする（ ）や婿養子
P172	③駆け落ち 結婚を許されない男女が（ ）の土地
P173	④眼をはばかりる（ ）する。遠慮する。
P174	⑤家路をいそぐ いそいで自分の家に（ ）
⑥寡黙（ ）が少ないこと。	
語群⑦～⑩	⑦恐怖 ⑧いかげん ⑨方法 ⑩他の事 ⑪下品
P175	⑦下卑た 言動が（ ）になる。下劣に見える
⑧鳥肌が立つ 寒さや（ ）などによって皮膚が、	

第3図 「語句の意味の確認のためのワークシート」（一部）

(3) 数学（数学Ⅰ）1学年：二次関数のグラフ

ア 単元の目標

- ・二次関数について理解し、関数を用いて数量の変化を表現することの有用性を認識するとともに、それを具体的な事象の考察に活用できるようになる。

イ 単元において定着を図る基礎・基本の概要

- ・二次関数のグラフの形状や増加減少、二次関数における定義域と値域の関係を理解し、活用すること。

ウ 単元を通して行った手立て

- ・手立て1：発問
- ・手立て2：ワークシート、板書、机間指導、授業形態（グループワーク）
- ・手立て3：振り返りシート

エ 実践後の考察

発問を通して中学校の既習事項の定着度を確認した。技能の定着度は高かったが、考え方という視点から見ると不十分なところが見られた。すなわち、問題の解き方は知っていても、問題の背景にある知識や考え方の理解が不十分であった。そこで、重要事項を整理するためのワークシート「マイメモシート」（第4図）を用いて基礎・基本の定着を図った。また板書の際に黒板を効果的に分割して使い、公式等を消さずに残しておくことで、授業中いつでも重要事項に戻れる工夫をした。検証の際には解法手順や別解等を整理するためのワークシート「マイソリューション」を使用した。これにより、生徒が自分の言葉で重要事項をまとめたり問題解決法を整理したりすることで、確実に基礎・基本の定着を図ることができた。

課題としては、授業中に生徒が思考し自分の言葉で記述するには時間が掛かるので、一部を家庭学習とするなどの改善を考える必要があることが挙げられる。

マイメモシート	重要度○○○○○
Field（単元名） 2次関数のグラフ	記入日 通し番号 No 月 日
用語 ・ 定義 ・ 公式 ・ その他	
○関数とは・・・	
○関数のグラフとは・・・	
○2次関数のグラフの特徴は・・・	
○ $ax^2+bx+c$ を平方完成すると・・・	
○三平方の定理とは・・・	

第4図 「マイメモシート」

(4) 数学（数学B）2学年：ベクトルと平面図形

ア 単元の目標

- ・位置ベクトルの意味を理解し、活用する。
- ・基本的な図形の性質や関係を、ベクトルを用いて表現し、ベクトルの知識を活用して考察する。

イ 単元において定着を図る基礎・基本の概要

- ・位置ベクトルの意味や直線、円のベクトル方程式を理解し、ベクトルの図形への応用を図ること。

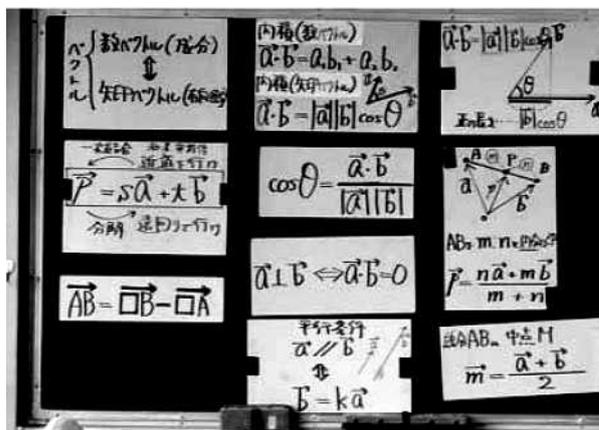
ウ 単元を通して行った手立て

- ・手立て1：発問
- ・手立て2：板書、教材・教具
- ・手立て3：家庭学習プリント

エ 実践後の考察

発問による生徒とのやり取りを通して既習事項の定着度の把握を行ったところ、高い定着度が確認できた。この結果は、今までも機会あるごとに既習事項の確認をしてきた積み重ねによるところが大きいと考えられる。単元の学習においては、「ポイントカード」（第5図）を使用して知識を系統的に整理して、繰り返し学習をさせるとともに、自作教具を用いて視覚的・動的説明を行い、ベクトルの概念をイメージ化させることで基礎・基本の定着を図った。その結果、生徒の興味・関心を喚起することができ、自習課題等における生徒の記述内容からも基礎・基本の定着に効果が認められた。

課題としては、自作教具に対して生徒は初めのうちは興味を持ったが、慣れや飽きが生じてきたので、常に改善を加えていくことが挙げられる。そして、数学的な見方や考え方の良さを認識させ、それらを積極的に活用する態度を育むことに留意していく必要がある。



第5図 「ポイントカード」による授業

(5) 外国語（標準英語）卒業年次：分詞

ア 単元の目標

- ・ペアワークなどを通して、音読や暗唱に積極的に取り組む。
- ・分詞を活用したり内容に応じた適切な表現等を選んだりして、英文を書くことができる。
- ・キーセンテンスを正しく音読したり暗唱したりできる。
- ・話の内容の展開を追って英文の内容を正しく読み

取ることができる。

- 動物園で起こった出来事の様子を表す語句の意味と用法を理解する。

イ 単元において定着を図る基礎・基本の概要

- 様々な分詞（現在分詞、過去分詞、分詞構文）の働きと意味を理解し、それらを活用して英文を正確に読むことができること。

ウ 単元を通して行った手立て

- 手立て1：小テスト（レディネステスト）
- 手立て2：机間指導、授業形態（ペアワーク、グループワーク）、基礎・基本に意識を向けさせる活動（基礎・基本に当たる部分を本文中から探して下線を引く活動）、声に出させる活動
- 手立て3：確認テスト（総括テスト）、家庭学習プリント、発表、アンケート

エ 実践後の考察

問題と文法のまとめを載せた小テストを使い、既習事項の基礎・基本の定着度を把握した。その結果、生徒間で定着度に大きな差があることが分かった。そこで、少人数クラスの特徴をいかし、個々の生徒の状況に応じた机間指導を重視した。また、本単元の基礎・基本である分詞を本文から探して下線を引かせ、常にポイントを意識させるように指導した。（第6図）

その結果、定着度を把握するためのテストに載せたまとめを積極的に利用し、自ら問題を解決しようとする姿勢が見られた。手立て1の小テストの結果から、英語を苦手とする多くの生徒にとって難しいと思われた分詞の理解が、確認テストを通して定着したことが分かった。

課題としては、机間指導等で指導が十分行き届かなかった生徒への手立てとして、自習課題等の工夫が挙げられる。

Thomas liked watching all the animals, but he especially loved the gorillas. The Johns went straight to the gorilla exhibit. There were six adult gorillas and a three-month-old baby gorilla. In the Brooklyn Zoo, the animals are not in cages. They are in large areas dug out of the ground. These areas have fences around them so the animals cannot get out.

Watching the gorillas, Sally started to cry. Kevin took her from Janet, and Janet looked in her bag for a bottle of juice. In those few seconds, Thomas got lost.

A woman saw Thomas climbing up the fence and shouted, "Stop him!" A tall man reached up to get him, but it was too late. Thomas fell down the other side of the fence. He fell 18 feet onto the hard concrete floor. He lay still with his head bleeding.

【桐原書店 transfer 英語総合問題演習コースC p. 28 より抜粋。一部改編。】

第6図 基礎・基本に意識を向けさせる工夫

(6) 外国語〈英語Ⅱ〉2学年: Lesson 5 「Mars-The Only Way Out?」

ア 単元の目標

- 音読、ペアワーク、グループワークなどの活動に

積極的に取り組み、コミュニケーションを図る。

- 教科書の文章を正しく音読したり、学習した文法事項や重要表現を用いて正しく書いたり、話したりする。

- 火星のテラフォーミング（惑星地球化計画）や地球の抱えている諸問題などについて書かれた英文を正しく聞き取り、読み取る。

- 未来進行形、未来完了形、不定詞の副詞的用法を含む文構造を理解する。

イ 単元において定着を図る基礎・基本の概要

- 未来進行形、未来完了形、不定詞の副詞的用法の働き及び意味を理解すること。

- 学習内容を活用し、コミュニケーション活動を通して自分の考えを表現できること。

ウ 単元を通して行った手立て

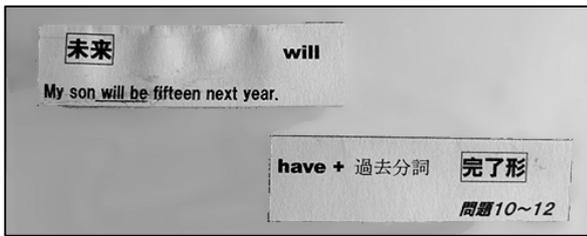
- 手立て1：小テスト（レディネステスト）
- 手立て2：ワークシート、教材・教具（プレゼンテーションソフトを使用した解説、文構造定着のための自作教具）、授業形態（ペアワーク、グループワーク）、基礎・基本に意識を向けさせる活動（英字新聞の活用）

- 手立て3：発問、確認テスト（総括テスト）、家庭学習教材（表計算ソフトを使用した自習教材）、発表、振り返りシート

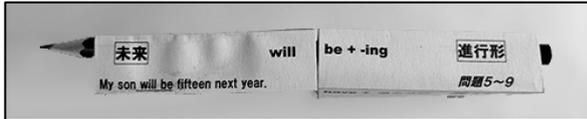
エ 実践後の考察

小テストで既習の基礎・基本の定着度を把握したところ、10点満点中9点以上の生徒が約95%という結果となった。そこで、既習事項の説明は最小限とし、新しく学習する事項に時間を掛けるようにした。英字新聞を読ませたり、ペアワークやグループワークなどを取り入れたりして、できるだけ英語を活用する場面を多く取り入れて授業を進めた。アンケートや確認テストの結果から、プレゼンテーションソフトを用いて、解説と問題演習を連動させた授業展開や、授業形態に変化を持たせて知識を活用する機会を多くした取組み、さらに文構造定着のための自作の教具（第7図）が、基礎・基本の定着には大変効果的であったということが分かった。

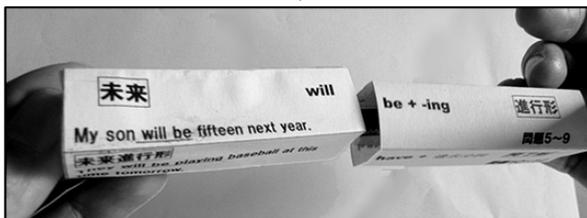
小テストでは非常に高い定着率を示したものの、単元の学習過程で定着度を発問等で再確認をしたところ、テスト結果と比較して低い定着度であることが分かった。課題としては、定着度を正確に把握するための適切な問題等の検討の必要性が挙げられる。また、定着した基礎・基本を活用して自己表現をしたり教科書以外の英文を読みこなしたりできるような工夫や、定着度に差がある生徒が個々のレベルで効率的に学習できる家庭学習用教材（第8図）の開発をより一層進めていくことが挙げられる。



未来に関係する文構造を書いた教具



筆記用具に通す



回転させて様々な文構造を学習する

第7図 文構造の定着を図る自作教具



第8図 表計算ソフトで作成した家庭学習用教材の一部（正解すると○が表示される）

## 研究のまとめ

### 1 研究の考察

「基礎・基本の定着を図るためのフローチャート」に基づく授業づくりを通して明らかになったことを、ここで簡潔にまとめる。

#### (1) 成果

既習の基礎・基本の定着度の把握に関しては、教員の経験則に基づくのではなく、小テスト（レディネステスト）や発問等の手立てを用いて、教員と生徒の双方が正確に定着度を把握することが、単元における基礎・基本の定着に向けた授業づくりにおいて、重要な第一歩となることが確認された。それにより、教員は

定着度の把握結果を単元指導計画づくりにいかすことができ、生徒は定着が不十分な箇所を意識して単元の学習に臨むことができた。

基礎・基本の定着を図る手立てに関しては、ドリルや書き取り練習・音読・暗唱などの繰り返しの学習活動だけでなく、教材・教具の工夫や板書の工夫、授業形態の工夫などの多岐にわたる手立て、そして、言語活動を充実させる取組みが学習の理解を促し、定着に効果があったことが挙げられる。さらに、これらの手立てが生徒の興味・関心を喚起し、学習意欲を高めることに大いに影響していることが、学習に対する生徒の取組状況などから確認できた。そして学習に意欲的に取り組むことで一層基礎・基本の定着が図られ、更に新たな意欲を生んでいくことが実践を通して明らかとなった。

基礎・基本の定着度の検証の手立てに関しては、発問や確認テスト（総括テスト）に加え、要約・説明・論述・発表といった活動を取り入れた。このような学習活動は準備や実践に時間が掛かったが、ワークシートの記述や発表内容等を分析することで、個々の生徒の定着状況を詳しく知ることができ、その結果を個別指導にいかすことができた。

振り返りシートやアンケートでは、選択肢で答えさせる問題に加え、自分の言葉で記述させることで基礎・基本の定着度の検証を試みた。これらの結果から、基礎・基本の定着状況を確認でき、生徒の学習に対する自己認識を促すこともできた。また、教員も生徒の記述から授業改善につながるヒントを得ることができた。

さらに、定着度の検証は単元の終わりだけでなく単元の途中にも実施し、その結果に応じて基礎・基本の定着を図る授業を再構成していくことの必要性も認識できた。市川（2008）は、理解や定着度の確認の重要性を指摘し、「『なぜ、こんなにわかってないのだ。ちゃんと教えたはずなのに』と驚くのではなく、日々の授業の中で、『理解状態のモニター』を入れていくこと」が大切であると述べている。

なお、検証の手立てに取り入れた要約・説明・論述・発表といった学習活動は、思考力・判断力・表現力等の育成につながるだけでなく、基礎・基本の確実な定着にも有益であることが分かった。さらに、知識・技能を活用できたことが自信となり、課題に対して積極的に取り組む生徒の姿が実践から確認できた。

#### (2) 課題

既習の基礎・基本の定着度を把握することの重要性は前述したとおりだが、実践の中では正確に定着度を把握できていないケースがあった。正しく定着度を把握するためには、どのような点に注意して小テスト（レディネステスト）や発問等の手立てを工夫すればよいのかを十分に検討することが必要である。

基礎・基本の定着を図る多岐にわたる手立ての一部に関しては、生徒の興味・関心を喚起する効果はあるが、飽きや慣れが生じるという状況も報告された。また、クラス全体に対する手立ての工夫だけでなく、個々の生徒の定着状況に応じた手立ての工夫にも改善の余地があることも明らかになった。

基礎・基本の定着度の検証においては、その検証結果を先の学習を見通して、どのように改善の手立てに反映させていくかが今後の課題として挙げられる。

授業実践全体を通して見ると、言語活動の充実という視点から、そのアプローチがやや足らなかった所が見受けられた。今後一層の充実を図る必要がある。

### (3) 確かな学力との関係

本研究は基礎・基本の定着を図る指導に関する研究として、基礎的・基本的な知識・技能の習得に重点を置き、その定着を考察してきた。(1)で述べたとおり、基礎・基本の定着を図る手立ての中で言語活動の充実を図る取組みや、検証の手立てに取り入れた思考力・判断力・表現力等を育むことにつながる要約・説明・論述・発表などの学習活動は、基礎・基本の確実な定着にも有益であることが分かった。また、基礎・基本が定着することが学習意欲にも影響し、意欲的に取り組むことで一層基礎・基本の定着が図られることが確認できた。つまり、「H20 答申」における「生きる力」を支える確かな学力の三つの要素を調和的に定着・育成することの重要性を、この研究を通して再確認できたといえる。また、本研究では検証までには至らなかったが、家庭学習を視野に入れ、個々の生徒の定着状況に応じた指導方法をより一層充実させていくことが、確かな学力を育むことにつながると考えられる。

## 2 今後に向けて

本研究では、単元を見通した授業づくりを通して基礎・基本の定着を図る指導を考察してきたが、今後は単元という短い期間ではなく、年間を見通した中・長期的な期間の中での定着を検証することや、教科横断的な視点から、基礎・基本の定着を捉えた授業づくりを考えていく必要がある。その際にも今回提示したR-PDCAサイクルを取り入れた、「基礎・基本の定着を図るためのフローチャート」は有効な手段であると考えられる。

### おわりに

本稿では、R-PDCAサイクルの中で行われる基礎・基本の定着を図る上での手立ての細かい内容や、3教科6例の単元指導計画案などを含む授業実践の詳細を紹介することができなかった。本研究を踏まえて作成したガイドブックで、是非内容をご確認いただきたい。

なお、本研究を進めるに当たってご協力いただいた

調査研究協力員の方々に深く感謝申し上げます。

[調査研究協力員]

県立川崎高等学校	佐々木澄子
県立横須賀高等学校	村田 克也
県立鶴嶺高等学校	中村 英之
県立麻溝台高等学校	中野 直人
県立橋本高等学校	山川 勝
県立寒川高等学校	揖斐 直次

### 引用文献

- 神奈川県教育委員会 2007 「かながわ教育ビジョン」  
神奈川県教育委員会 2009 「平成 21 年度 神奈川県立  
高等学校学習状況調査報告書」  
国立教育政策研究所 2010 「平成 22 年度 全国学力・  
学習状況調査 調査結果のポイント」[http://www.nier.go.jp/10chousakekkahoukouku/10\\_point.pdf](http://www.nier.go.jp/10chousakekkahoukouku/10_point.pdf)  
(URL は 2011 年 1 月取得) p. 4  
中央教育審議会 2006 「審議経過報告」 p. 51  
中央教育審議会 2008 「幼稚園、小学校、中学校、高  
等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善  
について (答申)」  
文部科学省 2005 「PISA 調査、TIMSS 調査の結果分析  
(中間まとめ)」[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/gakuryoku/siryu/05122201/014/001.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku/siryu/05122201/014/001.pdf)  
(URL は 2010 年 12 月取得)  
市川伸一 2008 『「教えて考えさせる授業」を創る 基  
礎基本の定着・深化・活用を促す「習得型」授業  
設計』図書文化社 p. 167

### 参考文献

- 国立教育政策研究所 2007 「平成 19 年度 全国学力・  
学習状況調査 調査結果のポイント」[http://www.nier.go.jp/tyousakekka/tyousakekka\\_point.pdf](http://www.nier.go.jp/tyousakekka/tyousakekka_point.pdf)  
(URL は 2010 年 12 月取得)  
文部科学省 2005 「平成 15 年度小・中学校教育課程実  
施状況調査 分析結果のポイント」[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/17/04/05042302/001.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/17/04/05042302/001.pdf)  
(URL は 2010 年 12 月取得)  
海保博之 2004 『学習力トレーニング』岩波書店  
小島宏 2007 『新教育課程をめざした授業づくり』教  
育開発研究所  
高階玲治 2005 『確かな学力向上のための指導 PDCA』  
教育開発研究所